

文学は どこへ 行くのか

ペレストロイカをめぐる日ソの対話
日本社会文学会=編

オリジン出版センター

日本社会文学会 編

文学は

ペレストロイカを

どこへ

めぐる日ソの対話

行くのか

オリジン出版センター

文学はどこへ行くのか

1991年6月10日 発行

定 価 1880円

編 者 日本社会文学会

発行者 武内 辰郎

発行所 (株)オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402

電 話 (03) 3260-0453

F A X (03) 3267-8697

装 幀 ローテ・リニエ

印 刷 K M S

落丁本・乱丁本はお取り替えます

はじめに

本書は、一九八九年二月九日午後二時から八時半まで（もちろん、途中、夕食休憩などを入れて）法政大学市ヶ谷校舎で開かれた、日本社会文学会主催の第一回日ソ文学シンポジウム「現代文学における価値観の変遷」の速記録を再構成したものに、付録としてチェールイシェフ博士の用意してきた論文「二〇世紀世界文学の芸術上の成果について」（当日は、その要約を話した）と、翌日、大阪ガーデンパレスホテルで行われた関西でのシンポジウムでのクズネツォフ氏の基調報告「ペレストロイカと最近の文学状況」の速記とを加えたものだ。

はじめ、法政大学の客員教授として来日していたキム・レイホ教授から「ソ連科学アカデミーの文学言語学部メンバーと日ソシンポジウムをやりませんか」と提案があった時、一抹ではない不安があった。いわゆる文学官僚の型通りの発言しか期待できないのではないかと。しかし、それは全くの杞憂にすぎず、本書を読み進めて行けば、たちどころに明らかなように、従来の文学理論を根底からくつがえすといっている議論だった。パリエフスキー世界文学研究所副所長が、自分は非共産党員だと名乗り、ソ連でも未発表という「一九世紀から二〇世紀にかけてのロシア文学の運動」というグラフをかざして説明を始めた瞬間、会場は沸いた。あと

で、わかったことだが、キム氏を除き、彼等は皆、ペレストロイカの中で、今の役職に就いたということだった。

六時間に及ぶ議論の中ではつきりしたのは、第一には、ソ連には今、百%以上の言論表現の自由があるということだった。最近、いくらか揺れ戻しが起きているようだが、かつてのような不自由の状態に復帰することはないし、不可能だろう。第二は、従来のソ連の公的理論だった「社会主義リアリズム」も、さまざまある文学方法の一つであり、それが自身の歴史的優越を主張しようとするのなら、いわば自由競争の中で、それを証明しなければならないということだった。第三は、当然のことながら、ペレストロイカはまだ、それに相応する代表作を持っておらず、見るべきものはペレストロイカ以前の、いわゆる停滞の時代に禁じられた作品の公刊と、社会的評論だということだった。第四は、文学におけるペレストロイカは、人類文学あるいは地球文学への強い意志と情熱を潜めているということだった。そして第五は、ペレストロイカされなければならないのは、むしろ現代日本文学であり、そのためには大衆文化の検討も必要ではないか、ということだった。

この大衆文化の検討ということについては、ソ連側も強い関心を示し、九〇年秋、モスクワで開かれた第二回日ソ文学シンポジウムは、このテーマをめぐって行われることになったのだ。第三回は、それらの議論の発展として今年一二月、再び日本で「トルストイと現代」と

いうテーマで開かれる予定だ。

ソ連におけるペレストロイカは今、危機的状況にあるようだ。その危機は単なるソ連一国だけの問題ではなく、世界あるいは地球の運命にかかわる問題でもある。もしソ連がペレストロイカに失敗すれば、それは世界大乱あるいは世界大戦争の導火線になるかもしれないからだ。そういう意味でペレストロイカを研究することは単にソ連の未来を占うことではなく、世界あるいは地球の未来を占うことだといっている。それは文学についても言えることであり、本書が文学についてののみならず、ソ連に現在も進行しつつあるペレストロイカについて考える時、一つの道しるべともなれば幸いだ。

一九九一年五月一日

編者を代表して

西田 勝

文学はどこへ行くのか——目次

座長挨拶……………	西田 勝……………
	6

第一部 ソ連側の問題提起

東西文学の対話……………	エフゲーニ・チェールイシエフ……………	14
ペレストロイカと精神的価値……………	フエリクス・クズネツォフ……………	23
ロシア文学における価値観の問題……………	ピョートル・パリエフスキー……………	29
表・一九世紀から二〇世紀にかけてのロシア文学の運動		
現代日本文学における価値観の変遷……………	キム・レイホ……………	38

第二部 日本側の問題提起

日本文学における過去と現在……………	加藤 周一……………	48
過去一〇年間における日本文化の変化と評価……………	鶴見 俊輔……………	56

ペレストロイカとバフチン……………	川端香男里……………	69
現代文学における転向と民衆……………	布野 栄一……………	78

第三部 討 論

問題提起を聞いて……………	江川 卓……………	88
風化した社会主義リアリズム 89	共通の価値基準の模索 92	共産主義と
キリスト教の対話 94	農業国家から工業国家へ 96	全人類の価値と階級
的価値 98	一般的価値と芸術的価値 100	ペレストロイカのもとの文学
104 「民衆」の概念規定 106	民衆の位置とその力 108	サブカルチュア
いと人類文化への接近 110	停滞期に高揚したソ連文学 113	「一枚岩の民
意」は存在しない 116	小説は絶えず自己を革新する 120	文化における世
代間の対立 123	進んでいるソ連の「表現の自由」 126	「民族的民衆」から
「地球的民衆」への脱皮 129		

附 録

I	二〇世紀世界文学の芸術上の成果……………エフゲーニ・チエールイシエフ……………133
II	ペレストロイカと最近の文学状況……………フェリクス・クズネツォフ……………149

文学はどこへ行くのか

座長挨拶

西田 勝

今日のシンポジウムの主催者である日本社会文学会の代表世話人をしている西田勝です。本シンポジウムを開くに至った、そもそものきっかけは、ここに座って居られる筈なんです。まだ見えていませんが、キム・レイホさん——ソ連科学アカデミー世界文学研究所の教授で、今年の四月から一〇ヶ月間、この法政大学で客員教授として比較文学の講座を担当しておられるキム・レイホさんから、半年ほど前に、ここに掲げられている表題の「現代文学における価値観の変遷」というテーマで日ソの文学者、研究者の間でシンポジウムを開きませんか、という提案がありました。同じ頃、やはりここにいらっしゃる加藤周一さんのところにも、そういう提案があったようであります。結局、日本社会文学会が、その提案を受けて立つことになったのですが、私達、日本社会文学会が進んでキム・レイホさんの提案を受けて立つたについて

は、二つの動機というか目的がありました。

現代日本文学の「ペレストロイカ」

まず第一の目的から言いますと、最近の日本文学は、この一〇年間ばかり、非常に変化しまして、言うなれば「価値観の変遷」とでもいうべきものが起きています。もちろん、ここにいらっしゃる加藤周一さんをはじめ第一次戦後派の作家や評論家も現役として活躍しておりますし、また「第三の新人」といわれる作家達も活動しています。そういう意味では現代文学は多様、多層ですが、全体として見ると、第一次戦後派が真正面から政治や社会の問題を扱って作品を書いた、あの時代は「伝説の時代」になりつつありまして、一九七〇年代の始め頃から政治や社会の問題に目を背けて個人的な日常生活や心理を描き出す方向に向かい、「内向の世代」、さらには「空虚の世代」と呼ばれる作家達が生まれ、その延長線上に最近では「村上春樹・吉本ばなな現象」と呼ばれる傾向が現われ、多くの読者をとらえるようになっていきます。「村上春樹・吉本ばなな現象」



西田 勝 氏

をどう見るかについては、いろいろ議論が分かれるかと思いますが、現代文学が、それを含めて全体として衰弱の一端を辿っているということについては異論がなからうかと思っています。

これでいいのだろうか。現代日本文学が、こう尻すばまりになったについては、やはり政治や社会の問題に目を背けてきたことに原因の第一があるのではないか。日本社会文学会は、つまり今から四年半ほど前——一九八五年の五月に、そういう状況を何とかして変えたいということとを大きな動機の一つとして創立された新興の学会であります。そういう言葉を使えば、現代日本文学の「ペレストロイカ」ということを大きな動機の一つとして生まれた団体であります。

文学と社会との関係を歴史的にも構造的にも明らかにして行く——それが私達の学会の共通の目的ですが、現代日本文学の「ペレストロイカ」ということを考える場合、従来、私達が「文学」としていた枠組も一度、根本から壊してみる必要があるのではないか、「文字で書かれたものは、すべて文学」という原点に、もう一度、帰ってみる必要があるのではないか、そういうことも共通の理解として日本社会文学会は誕生しております。

ですから、私達の学会は単に研究者だけではなく、小田実・住井すゑ・李恢成・松下竜一のような作家も入会しているし、また色川大吉・大江志乃夫のような歴史家も入会しております。最近では、長崎市長の本島等さんも入っております。本島さんと雑談していた時、「私は本当

は小説家になりたかったのですが、失敗して市長になりました」と言われたので、お誘いしたら、「もう一度、文学の勉強をしてみたい」ということで、入会されたわけです。

ソ連側が「価値観の変遷」という言葉で問題にしようとしているのは、もちろん、現在のソ連の文学界で劇的に進行しているペレストロイカのことでもあります。そして私達の学会が行なおうとしていることも、現代日本文学のペレストロイカであります。さらに言いますと、もしゴルバチョフのソ連が進めているペレストロイカが対決しているのが、或る意味でツァーリズムの負の遺産といってもいいならば、現代日本文学における「村上春樹・吉本ばなな現象」というものも天皇制と文学との関係の一結果といって差し支えない。そこにも共通の土台がある、という次第で、キム・レイホさんの提案を進んで受けて立つことになったのであります。

ソ連にゴルバチョフ政権が誕生したのが一九八五年三月日、本社会文学会が生まれたのは、その年の五月。ゴルバチョフ政権と日本社会文学会とは比較の対象にもなりませんが、一九八五年というのは世界史の進行にとって一体、どういう年だったのか、何か符合のようなものを感じます。誤解のないように付け加えますと、もちろん、ゴルバチョフさんの指令を受けて日本社会文学会が生まれたわけではありません。（笑）

キム・レイホさんの提案を受けて立つことになった第二の目的は、米ソ間におけるINF（中距離核戦力）廃棄条約の締結以来、ヨーロッパでは軍縮措置が着々と講じられ、平和が訪れ

ているように見えますが、ひとたびアジア・太平洋に目を転じますと、海洋核は、手つかずのまま、むしろ軍拡が進行しているといつていい状態にあります。それなのに歴代の日本政府は、アメリカの鼻息をうかがって、この地域における軍縮のイニシャチブを取ろうとする気配すらない始末です。こういう状況を何とか変えなくてはと、私自身は、新聞やテレビで御存知かと思いますが、同志の人々と昨日、非核東京都宣言を求める百万人請願署名運動というものを始めました。もちろん、それはアジア・太平洋に軍縮と平和をもたらすための一つの方法であり、それをふくめて、さまざまなアプローチが、そのために試みられる必要があります。ソ連とは国交はありますが、平和条約はまだ結ばれてはおりません。ソ連との間に友好と信頼関係を築き上げるために経済的な交流だけではなく、文化的・学術的な交流を進める必要があります。そのための一助ともなれば、というのが第二の目的であります。

今から八〇年前、近代日本文学の建設者の一人であった二葉亭四迷は、当時、次第に社会的関心を失いつつあった日本文学の現状に飽き足りず、日露が再び戦わないために何かをしなくては、と新聞特派員としてペテルスブルグ——今のレーニングラードに向かいました。しかし彼はそこで間もなく病をえて帰国中、インド洋上で帰らぬ人となりました。彼は日露相互理解のためには、文学がもっとも有効な手段であると考えていました。そういう二葉亭の果たされざる遺志を、私達なりに継ぎたいということも、私達がキム・レイホさんの提案を受けて立つこ

とになった動機の一つであります。

以上が私達、日本社会文学会が、今日の日ソ文学シンポジウムを開くに至った目的であり、動機であります。今日は何といっても六時間に及ぶ長丁場ですので、姿勢を楽にして聞いていただきたいと思います。

ではまずソ連側のパネリストから発言をお願いしたいと思います。